著者は日本語研究の爲めには、北はアイヌ語、南は琉球、臺灣語迄親しく手に掛けて研究されたんだが、今こゝにその詳細なる報告論文の一を世に問うた。それにつけても著者のアイヌ語研究、宮古語研究、前者は整理も殆んど出來てゐたし、後者は我國で學位論文として提出すべく起草中であつたんだが、それ等も續々と學界に惠貽せられん事は希望に堪えない。（石濱純太郎）

境野黃洋著

支那佛教精史

本書は昭和八年十一月に六十三歳で歿せられた境野博士の遺稿である。博士が前に（昭和二年）出版せられた『支那佛教史講話』卷上を詳細周密に改訂增補の形を以て、執筆しておかれたものであつて、左の篇章を分つて、本文一千八頁に佛教傳來から、南北期末までの支那佛教史を論述し、更に索引を附した大冊である。

第一篇　羅什以前——古譯時代

第一章　佛教の傳來

第二章　安息佛教

第三章　月支佛教

第四章　天竺及び康居の僧侶

第五章　于闐及び龜茲佛教

第六章　經錄の成立

第二篇　隋唐以前——舊譯時代

第一章　鳩摩羅什の學統

第二章　廬山と道場寺

第三章　涅槃經の翻傳

第四章　南北朝の譯經

第五章　地論宗

第六章　攝論宗

第七章　小乘三藏の譯傳

第八章　大乘戒の傳譯

第九章　禪宗の起源

第十章　成實宗

第十一章　外護と排佛破佛

以上、章を分つことは前著『講話』と異らないが、その內容は殆んど倍以上に增訂せられてゐる。先年私が佛教學大會の席上で老博士から「自分は今舊著の改訂をやつてゐるが、京都の某君の佛教支那傳來說は何に出てゐる

か」とある若い學徒のことを質問せられたことを思ひ出して、最後まで斯學につくされた博士の精進に、先づ何よりも甚深の敬意を表せざるを得ない。

第一篇先づ佛教の支那傳來に就いての諸說を網羅し批判して、その多くが信ずべからざるものなることを論じ唯漢哀帝元壽元年の「伊存口授經說」は、記錄上佛教傳來の最初の事實となすべきも、それ以後約百五十年間には、佛教に關する史的事實として的確と認むべきもの殆んどなきが故に、支那佛教は事實上、後漢桓帝の建和二年安世高の來支に始まると云ふべしと結論せらる。略今日の學界に認められてゐる說であるが、唯博士が『後漢書』の楚王英の信佛も認め難く「襄楷傳」に見ゆる上疏文も『四十二章經』成立（博士によれば宋の中頃）後の僞作なりとせらるゝ大膽な論斷には、服しかねる。後漢の明帝が楚王英に與へた詔を否認すべき有力な史料は存しない。他方マスペロー氏が巧に論じた樣に、楚王英一族の信佛の發展として許昌寺の成立も考へられる。（本誌增村氏の紹介參照）また安帝に用ひられた張衡の「西京賦」にも、禁欲修道者としての桑門のことが見えてゐて、おぼろげ乍ら、明帝以後、中原地方に於ける佛教々團の存在發達も推察出來る。また現行の『四十二章經』は恐らく六朝初期の改訂を經たものであらうが、改訂以前、漢魏時代の『四十二章經』の存在も考へる餘地があるし、所謂「老子化胡」の說は、西晉王浮の『化胡經』以前にはなしと斷定せらるゝのも早計かと思ふ。從つてこれ等を理由として『後漢書』の「襄楷傳」の上疏文を宋頃の僞作とするのも、斷にすぎると思ふ。要するに私は『後漢書』の記事否認は、もつと有力な資料なくしては不可であると思ふのである。

因に博士は『牟子理惑論』を常盤博士の說に贊して、宋の明帝時代の惠通の「駮顧道士夷夏論」以後のものとせらるゝが、（第二篇十一章）私は北京大學の周叔迦（牟子叢殘）胡適（論學近著第一集）教授や九州大學の山內教授（文學研究四、五、六）等も論ぜられた如く、後漢末の著と認め得べきものと考へてゐる。『牟子』が惠通の文から出てゐるのではなくて、逆に惠通が『牟子』を引いてゐるのである。

第二章以下には、安世高を初め、安息、月支、天竺、康居、于闐、龜茲等から來た沙門や、その地方から賚らされた佛典並にその翻譯に就いて主として論じ、第五章龜茲佛教の節には、佛圖澄に系統を引く道安の佛教を說

き、またその前後に行はれた「空」義に關する諸學說を併せ述べ、第六章には、梁の「出三藏記集」を初め隋唐時代になれる現存經錄並に今日散佚せる魏晉以來の經錄に就いて記されてゐる。

次に第二篇羅什以來は、支那に於ける佛敎々學の組織展開期である。先づその端を開いた北支那に於ける鳩摩羅什の譯經並びにその門下の佛敎を論じ、第二章に南支那に於ける慧遠を中心とした廬山佛敎と建康道場寺を中心とした佛陀跋陀羅惠觀等の佛敎を述べ、併せて法顯、寶雲等の入竺並に傳譯に及ぶ。有名な廬山の念佛結社に就いては、私は曾てある友人の論文を評するに際し、明治以來の日本佛敎學界の諸大家が、何れも明白な元興元年(四〇二年)の謝靈運の結社誓文を、太元十五年(三九〇年)と誤つてゐられることを注意したことがあつた。(淨土學第四輯) 境野博士の前著には、廬山の淨土敎に就いて多く論述せられてゐなかつたが『精史』には、爲に八十頁近き詳述增補をなし、その中に、元興元年說を採用せられてゐる。

第三章『涅槃經』の翻傳以下、主として佛典の傳譯を中心に諸學派の成立を論じ、第十一章に、後秦王姚興の興佛より北周武帝の破佛、靜帝の佛法再興まで、歷代の興佛排佛並に佛道論爭を述べて本書を終る。今その一々の章を紹介することは紙數も時間も許さない。

要するに本書は、既刊の支那佛敎史中の最も新しい最も大なるものである。大藏中の資料を縱橫に採つて批判し、而も廣く近來頗る盛んな佛敎學界の研究成果を參照し、自由に取捨し論斷せられた本書は、實に明治大正年間に新に開拓され頓に發達した、日本の支那佛敎史學の總和として聳ゆる最大の金字塔である。博士の幾多の新說頗る敬聽すべきものあり、時に斷案急にして、やゝ奇に過ぐるの感あるものありとは云へ、後進を導くこと至大である。翻譯史を中心とした支那佛敎史としては、實に精なるもの、されど佛敎が支那人の哲學として宗敎として發展して行つた迹を明にするには、尙更に支那の社會や文化に就いて多くの考慮をはらはれて然るべく、殊に支那の宗敎として行はれた佛敎には、その僧俗の敎團に就いての研究がもつとあつて然るべく、爲に六朝時代には特に幾多の遺物遺蹟が貴重な材料を提供してゐることを思はざるを得ぬ。私は斯學の最大先輩の大著を前にして、敎へらるゝ所頗る大なると共に、今後の學徒に遺された開拓の餘地も亦頗る多いことを思ふのである。敢

て江湖に本書を薦むると共に、妄言を多謝する。

（菊版、本文一〇〇八頁、索引四三頁、昭和十年十二月、黄洋博士遺稿刊行會發行）定價拾貳圓

（塚本　善隆）

Les origines de la communauté bouddhiste de Loyang. Henri Maspero. Journal Asiatiqul, Tome 225, 1934, No. 1, PP. 87—107.

マスペロ氏は先に Le songe et l'ambassade de l'Empereur Ming. (BEFEO, X, 1901) をものして、佛教の支那傳來が明帝の「靈夢遣使」に依るとされるを、二世紀終頃洛陽の教團に生れた傳說に過ぎない事を論證された。然し早く佛教の行はれて居た事は、楚王英が信奉して居た事より明かな事實であり、前漢哀帝元壽元年（西紀前二）に博士弟子景盧の浮屠經を受けた事魏略がある。又支那渡來の外國人間に行はれて居た事もあつたであらう。佛教傳來の年代が確定されないならば、教團の初期の形態に關する考察は當然取上げらるべき問題である。マ氏は先の論文と同時に Communautés moines bonddhistes chinois au II° et III° siècles. (ibid. X, 1910) に於て教團に就て述べられたが、今回更に考察を進めて楚王英を繞る彭城の教團の性質を明かにし、般舟三昧經記に見ゆる許昌寺を考究して、彭城の教團と洛陽の初期の教團との間に一脈の聯絡ある事を立證せんとされたものである。

楚王英が明帝の詔に應じて罪を贖んが爲に黄縑、白紈を獻じた永平八年西紀六五の事件後漢書卷七二英傳は有名である。明帝は其獻物を返して伊蒲塞、桑門の盛饌を助けしめたが、これは明かに僧侶のみでなく信者のあつた事を示すものである。英の就國は建安二十八年西紀五二であるが、それより楚の彭城に其保護の下にあつた教團を考へて、マ氏は道家の仲介に依つて佛教が入つて來たものと考へる。乃ち此地方は漢代の道家の中心地であつたから、英も道家を奉じて居たが、同時に佛教をも信奉して居た。當時支那人には佛教も道家の一派と見做され、英の下に於ける彭城の僧侶等も方士と同じく長生の術を傳へる者と考へられて、教團を、少くとも佛教らしい道家（Taoisme bouddhisant）の教團を形成して道家の教團の中に擴がつて行つたのは、ローマ帝國に於けるユダヤ教とキリ